

郷土館だより

Vol. 11, No. 1

1988. 10. 30



「コウラブセ」と聞いて、何の事かお分りでしょうか。耳慣れない言葉です。コウラブセとは、実は「石道」のことで、三島の町中でこうした名称が生きていました。

「社会保険病院の東側に石畳の道があるがあれはいつ時代のもので、保存の価値があるだろうか？」という問い合わせがあったので、さっそく出掛けて見ました。

行ってみると確かに在りました。場所は、御殿神社東脇を南に少し入り左折、ゆるやかに御殿川の方に下った所。そこの坂道がコウラブセでした。道は30メートルくらいの長さでしょうか。石は長い年月たくさんの人々が歩いたものでしょう。つるつるとして、摩耗の跡が明らかです。しかし、それは紛れもなく石の道で、我々が「石畳」と呼んでいる箱根の石道と同じでした。=(写真)

昔を語るコウラブセ（甲羅伏せ）

近くに昔から住むおばあさんに訪ねてみました。「おばあさん！あそこに石の道があるんだけどあれ何ていうの？」という私の問いに対しておばあさんは次の様に答えてくれました。

「コウラブセって呼んでるよ。亀の甲羅を伏せた様に見えるからだと思うよ。いつからだか知らないが昔からのもんだよ。徳川時代だと思うよ。徳川時代には、この道を唐人（外人）が歩いたそう。何でも唐人には大社前を通らせないためだ。明治になってからは農道だったよ。」

なるほどと思いました。コウラブセとはいって得ています。そして、この道は短いけれど趣があります。コウラブセを下りきると井戸があります。少し行くと小さな社（やしろ）

があります。腰切り不動尊だといいます。これにお参りすれば、お産が軽く済むと信じられ、詣でる人は多かったと聞きました。さらに下ると御殿川にかかる橋を渡ります。御殿川の清流はきれいでした。

ここに石道を築いた理由は明らかではありませんが、いくつかの理由にささやかな想像をめぐらせてみました。一つは、この近くに在った江戸初期の御殿の門の石道。とすれば将軍もここを通ったのでしょうか。もう一つは、坂道が滑り易いから地元の人々が石を敷きつめ通行の便を図った民間の道。粋な道普請と言えます。

理由は何であれ、ここは歴史の道と言えるでしょう。箱根の「石道」と共に「コウラブセ道」も又後世に残したい道です。

なつかしい

紙芝居

郷土館玄関前で
行われた紙芝居の
実演



最後の紙芝居屋

「戸辺春次さんのこと」

戸辺春次さん（三島市谷田在住、大正4年3月生れ）は、三島ではちょっとした有名人です。というのは、戸辺さんは「なっとう屋のおじさん」と「紙芝居屋のおじさん」という二つの顔で、たいていの三島っ子に知られているからです。

戸辺さんが紙芝居屋を始めたのは、昭和25年頃のことでした。終戦間もない頃のこと、子供らには満足なおもちゃも無い時代でした。もちろんテレビなどありません。そんな時代だから、街にはたくさんの子供らが広場を埋め尽くして、遊び回っていたものでした。彼等の遊び場は空地だったり、そこらに少しでも空間があれば十分でした。

広場は子供達の世界であり、そこに生えている大木は敵の襲来を見張る為の物見櫓となりました。

そんな子供の国に、戸辺さんがやって来ました。紙芝居と安いお菓子を自転車の大きな荷台に積んで。

戸辺春次さんは、三島や周辺の町村に影響のある紙芝居屋の支部長を務めていました。戸辺さんが紙芝居屋を始めた頃は町田という支部長がいて、戸辺さんもその元で紙芝居屋

をやっていましたが、後になって独立したものでした。戸辺さんはこの頃の事を「旗揚げして支部長になった」と述懐しています。

支部長は配下に何人かの下部の紙芝居屋を抱えています。戸辺さんの所には8人程の紙芝居屋が寄っていました。支部長は東京の絵元（えもと）から紙芝居を借り受け、お菓子を仕入れました。借りる絵の数は、配下の8人の紙芝居屋が次の絵が来る一ヶ月後まで営業の出来るのに足りる巻数を用意し、仕入れのお菓子もまた一ヶ月分の量を仕入れたものでした。こうして支部長以下9人の紙芝居屋は、絵を順々に回しながら、各々の担当地域（縄張り）へ商売に出掛けたものでした。約一ヶ月後、全部の紙芝居が済んだところで、絵は支部長の所へ集められ、次の興行地（沼津や静岡）へ送られました。同時に東京の絵元からは新しい紙芝居が入荷しました。このように支部長の役割は全国組織の紙芝居配給会社の支店長のようなもので、当然ながら末端の紙芝居屋よりは収入も多かったのです。

戸辺さんが支部長をやっていた昭和30年の初めの頃は紙芝居の全盛時代でした。三島地域だけでも、戸辺支部長のところに8人、元の親方の町田さんのところには12人くらい、その外に浜松の方からの侵入紙芝居屋も居たものでした。20数人の紙芝居屋が入乱れ、さながら紙芝居屋の戦国時代の様相でした。

戸辺さんにはこの良き時代の思い出話しが

子どもの世界

とおもちゃ展から

昭和63年6月20日から8月30日まで、郷土館1階展示室で開催した紙芝居とおもちゃ展は、夏休み期間中を含めたこともあって親子連れでにぎわいました。特に若い父親、母親が大きな声でストーリーを読み上げ子どもに聞かせている光景はとてもほほえましいものでした。

たくさんあります。なかでも印象に残るのは「侵入して来た新参よそ者の紙芝居屋と、勢力争いでケンカをしたこと」だったそうです。何人もの紙芝居屋がやって来たことで忙しくなったのは街の子供たちでした。紙芝居屋が日に3人も来たりすると、子供たちは15円を持って（料金は1回5円）、紙芝居のはしごをやったものだといいです。裕福な家の子供ならともかく、当時はたいていの子供にとって5円というお金は大金でしたから、この状態は楽ではありませんでした。そんな時代でしたが、戸辺さん達紙芝居屋にとっては懐しく良き時代として思い出されます。

戸辺さんの稼ぎは「多い日で一日3千円。儲けは2千円にもなったものだった」と聞きました。

記憶に残る思い出話し

戸辺さんの自転車の荷台に積んだ箱の中にはお菓子がいっぱい詰まっていました。水あめ、ソースせんべい、梅ジャム等々。子供たちは水あめをこね回し、これをなめながら紙芝居に見入ったものです。基本的には5円でお菓子がもらえて紙芝居が見られました。10円出せば、せんべいに付けてくれる梅ジャムの量が多くなりました。子供たちのふとこ

具合いで、5円の子供も10円の子供も居たものです。

戸辺さんはこうした子供たちを毎日眺めていて、その中の一人の子供に忘れられない思い出が残りました。

その子は恐らく貧しい家の子だったのだと思います。毎日紙芝居を見に来るのですが、5円がありません。もちろんお菓子はもらえず、見る権利もありません。しかし、彼は近所のガキ大将だったようです。回りの子供たちからも信頼されていました。

戸辺さんは困りました。その子に対して、「お金を払わないと見てはダメだ」と言うべきか、黙ってただで見せてやるべきかと。というのは、こうした場合ガキ大将を仲間外れにして追い払ってしまうと次の日から他の全部の子供たちが紙芝居屋に寄って来れなくさせられてしまうという例を、戸辺さんは同業者から聞いて知っていたからでした。外にも困った理由がありました。このガキ大将はなかなか良い子で、戸辺さんは何となくこの子が好きだったからでした。そんなわけで結局、戸辺さんは、この子の「ただ見」を容認していました。

そんなことがあって何年か後、いつもの様に戸辺さんが紙芝居をやっている広場に、一人の青年がやって来て紙芝居を見物していました。紙芝居終了後、青年は戸辺さんに「おじさん覚えている？僕は昔おじさんにただで紙芝居を見せてもらった〇〇だよ。あの時のことは本当に感謝しています」と言い、ていねいなお礼を残して帰ったのでした。

戸辺さんは「本当に良かった」と思ったものだそうです。

紙芝居屋の幕切れ

史料によれば、昭和25年頃の東京には3千人の紙芝居屋が居たと言われます。全国では約5万人、三島だけでも20人以上が確認できます。この頃はテレビの普及もそれほどでなく、紙芝居屋による「黄金バット」全盛の時代でした。また戦後第1次マンガブームと言われ、関西を中心に手塚治虫の人气が盛り上って来たのもこの頃です。

昭和29年、全国のテレビ受信契約数が一万を突破します。昭和30年、力道山がプロレスで大活躍をします。昭和32年、テレビ「スーパーマン」「名犬リンチンチン」の人気が出ました。

このようなマンガ本出版ブーム及びテレビの普及に反比例するように紙芝居は衰退の一途をたどりだしました。上記したような昭和30年代が、時代の大きな分岐点であったと言えるでしょう。

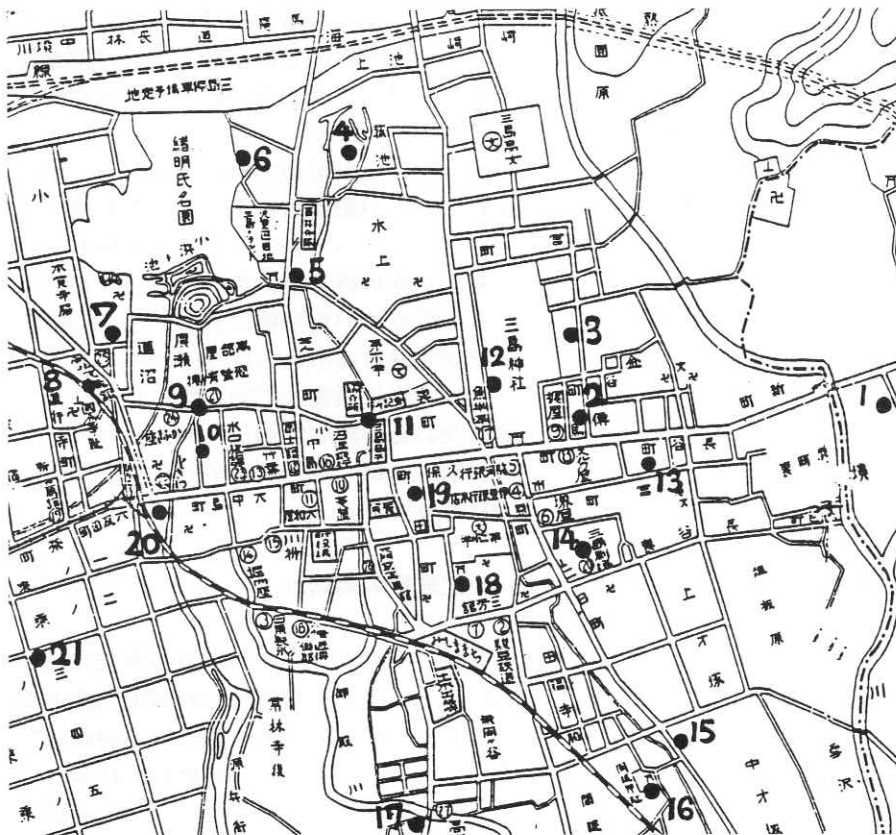
戸辺さんの紙芝居屋はこれより約10数年遅れて、昭和50年の初めに幕を閉じることになります。それは、戸辺さんが紙芝居配給会社から残った紙芝居をゆずり受け、三島の子供たちのために商売を続けていたからです。しかしながら、その戸辺さんの顔も時代とともに「紙芝居屋のおじさん」から「納豆屋のおじさん」に次第に変化して行くのは、時代の潮流であり防ぎようがありませんでした。

三島における紙芝居屋の広場

戸辺さん達の紙芝居屋が活動した広場は、すなわち街の子供達の遊びの空間でした。アキチ（空き地）ヒロバ（広場）などと称されかつては街の中のあっちこちに在ったものです。アキチの所有者も居たでしょうが、そこにフェンス等を張りめぐらすこともなく、子供達には自由に使える遊び天国となっていました。

神社や寺の境内は子供の遊び空間とされました。そして、やはり紙芝居屋の活躍の場にも供されています。

以下に、戸辺さんが範囲としていた地域における紙芝居広場（回り順）及び三島市内で40才以上の方々から調査させて頂いた紙芝居広場を地図上に記して置きます。



▲昭和初期の三島町著名案内図を使用。

1. 宝鏡院
 2. 天神社
 3. 空き地
 4. 菰池
 5. 水泉園
 6. 愛染小路
 7. お日朝さん
- 以上1～7までが戸辺さんの回り順路
8. 空き地
 9. 広瀬橋
 10. 三島温泉通り
 11. 赤橋
 12. 浦島さん
 13. 日隅さん
 14. 祐泉寺
 15. 言成地藏
 16. 間眠さん
 17. 奈良橋
 18. 楊原神社
 19. 八坂さん
 20. 三ッ石さん
 21. 教会前

三島の原始・古代をさぐる

大昔の三島人はどこに住み、どのような生活をしていたか。迫田信之先生(佐野小教頭)を講師に市内の中学生22人がマイクロバスで石器時代から古墳時代までの遺跡の変化を見学しました。(8月11日)

—— おもな見学地 ——

箱根の里……箱根山中にある少年自然の家、「箱根の里」が建造された時、発掘が行われました。1万4千年前(先石器時代)の石器・縄文時代の土器等が出土しています。



▲資料室で、発掘の写真や、石器・土器の説明を受ける。(=箱根の里)

初音ヶ原遺跡……箱根松並木の北側では、現在発掘調査が進行中です。ここ一帯は、県内で最も古い遺跡の一つで、約2万7千年前の石器が多く出土しています。土抗は狩りの落とし穴で、日本で最も古いものです。

千枚原遺跡……昭和23~39年に3回発掘され、土器や敷石住居跡、炉跡が多数出土しました。現在一部が緑地公園となっています。

八王寺神社・夏梅木古墳群……円墳といわれる八王子神社及び、その東の丘陵に広がる夏梅木古墳群を徒歩で見学。わずかに残る石棺の残骸を確認しました。

向山古墳群……箱根山裾に位置する向山小より東、丘陵の尾根伝いに点々と13の古墳が残っています。7世紀頃の土豪の墓です。道路からヤブをかき分けて入ると、丸い塚がくっきり浮かび上がりました。



▲向山古墳の前で、説明を聞く中学生。

中島下舞台遺跡……三島の平野部を流れる御殿川の下流の稲作地帯。弥生~古墳時代にかけての集落が数層にわたり出土しています。この付近は条里制の遺構も見られます。

三島大社……現在、社務所建設予定地を発掘中で、調査員の説明を受けました。古墳時代の住居跡や奈良時代末頃の瓦が出土しています。

又、鎌倉時代以降は祭祀用具の捨て場だったことなど、多様な変遷を知りました。

伊豆国分寺跡……奈良時代に建立された伊豆国分寺跡には、塔の礎石(8個)が残っており、天平時代の三島の繁栄を物語っていました。



▲伊豆国分寺塔の礎石

中学生達は、石器時代・縄文時代に箱根山麓で生活していた人々が、稲作の技術が伝わると、平野部へ下り、その集落が発達していく過程が実感できたようです。

≡≡≡ 土と水と火に 親子縄文土器づくり

今年も親子34組（小学校4年～6年の児童と親）が縄文土器作りにとり組みました。その奮闘をお伝えします。



土ねり

縄文式土器作りが成功するかどうかは土ねりにかかっています。

縄文人と同じ材料、山の土・砂・粘土（テラコッタ）を、約2時間ねり込みます。ねるほどに土は均質となり、つやと弾力が出ていい粘土になります。

炎天下、流れ落ちる汗もねり込まれました。（7月21日）

形をつくる

今回は、親子の協同作業で縄文土器の形を作りました。

3日間冷暗所でねかした土は、しっとり、弾力のある粘土になっていました。

郷土館に展示されている土器を手本に輪積み法で積み上げます。円板状に底を作り、親指くらいの太さの粘土紐の輪を積みます。1～2本積んでは、ていねいに指でつぶしよく密着させます。竹ペラで形を整え、最後に周囲に文様をつけます。

ひびが入ると始めからやり直し。だから皆真剣な顔です。

文様をつける時になると、あちこちで「ここは貝の文様にしよう。」

「いや、紐のへびがいい。」

親子の会話がはずみました。（7月24日）



挑戦

▶ マキ運びをし、野焼きの準備をする子供たち。



焼き上げ

成形の後、約1ヶ月乾燥させた土器、これを焼いて、かたい縄文土器にします。

露天で焼く「野焼き」ですから天気左右されます。昨晚からの雨が降り止まず、皆、やきもきしました。しかし、9時過ぎには雨も上がり、快晴となりました。

まず大量のマキを運びます。地面の湿気を抜くため焼成場所で「空だき」をします。こ

の間、土器を陽に当てます。約2時間、空だきをした後、土器をオキの上に置き大量のマキが山と積まれ、いよいよ火が入ります。

炎は、周囲の竹林よりも高く上がり、そばに寄れないほど熱く、近づけば、チリチリと髪が焼けます。火力を落とさないよう、次々とマキをくべます。子供達も必死でくべます。こうして2時間。白くなったオキの中から、かっ色の土器が顔を出しました。割れた物が一つもなく大成功でした。 (8月24日)



◀ 出来上がった土器の前に記念写真。

古文書入門講座野外学習

2年目に入った古文書入門講座の受講生24名が、研修で、MOA美術館、伊豆山郷土資料館、箱根町立関所資料館を見学しました。(10月19日)

美術鑑賞の書跡と、歴史史料としての古文書の両方を見学する事ができました。

展示されている書を何とか解読しようとする熱心な受講生が多く、新たな学習意欲が湧いているようでした。

MOA美術館……学芸員の方に、展示中の古書の見方、古写経の鑑賞のポイントを解説していただく。「仏教の美術展」見学。
伊豆山郷土資料館……北条政子が自分の頭



髪で縫い、奉納したといわれる「頭髮曼荼羅」他、伊豆山神社の宝物を見学。

箱根町立関所資料館……箱根関所関係の資料(通行手形、関所破、古代道中絵図等)と箱根宿関係資料を見学。



寿大学

「楽寿園の歴史」

(9月3日)

三島市福祉課主催の「寿大学」が楽寿園内の野外劇場で開催されました。(参加者100名)

郷土館も協力し、「楽寿園の歴史」を解説しました。皆造営された小松宮様について熱心に傾聴されました。



◀ 明治初期から昭和16年三島市誕生まで、新聞を主体に写真と資料で郷土三島を振返る「新聞で見る三島の明治・大正・昭和展」を5月末まで開きました。写真=資料に見入る北高生。

郷土館だより No.31

昭和63年10月30日発行

(年3回発行)

編集	三島市郷土館
住所 〒411	三島市一番町19-3
	TEL 0559-71-8228
発行	三島市教育委員会